

臨床獣医師から見た

養鶏業界 64

株式会社ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

七八年ぶりの高病原性 鳥インフルエンザ発生

二〇〇四年一月十二日は成人の日で祝日でした。ある生産者から、「山口県で高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）が発生したらしい」という情報が寄せられたのでした。

著者は、当日出社していた若手獣医師に、それまでに蓄積していた各クライアントの鳥インフルエンザ（以下AI）モニタリングデータをそれぞれのオーナー宛てに直ちにファックスで送信することを指示しました。

表紙には、

①山口県でHPAIが発生した可能性があること

②これまでに各農場各ロットのAI抗体をモニタリングし続けていたため、それぞれの鶏群にはAIはないこと

③もし、山口県のAI情報が確定した場合には、直ちにファックスしたデータ（AI陰性を証明するもの）を流通先へ届け、AIの風評被害を食い止める手だてを講じること

④AIが確定しない場合には、データは使用しないことを、AI風評被害を避けるための手順として記述しました。

残念ながら、山口県におけるHPAIは、真正の強毒型高病原性鳥インフルエンザと確定されました。発生農場を中心として半径三〇kmの防疫エリアに関して、車両を含む養鶏にかかわるすべて資材の移動禁止が設定されました。

その内容概略をコラム1に記述しました。この症例は死亡するものが多いため、家畜保険衛生所へ相談されました。担当官は当初、大腸菌症と診断していたようです。

実際に発生するまでの印象によれば「AIが農場に発生すると、あつという間に全体に拡散するもの」と理解されていきましたから、伝播に数週間という時間経過は多少の奇異感がありました。しかし、その後これまでの発生の際の情報を見るかぎり、AIの感染スピードはさほど早くはありません。

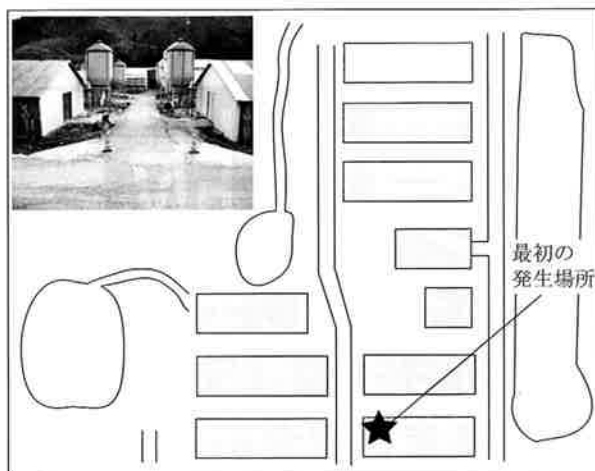


図1 山口県でHPAIが発生した農場

二〇〇四年までの HPAIに対する受け止め方

山口県の発生までに、AI啓蒙を図って、アメリカ合衆国農務省ラポラトリー所長・スウェイン博士と、メリアル(株)の国際学術部長・モンテイエル博士を招待して、第一回日本養鶏産業研究会でセミナーを催しました。

その内容は、あくまで概説でインフルエンザウイルスの遺伝子構造や特性、特に弱毒タイプが強毒タイプ

《コラム1》

【山口県で発生したHPA1】

2004年のHPA1に対する規制 (Jan. 13, 2004)

発生農場にかかわる処理システム

〈A1・PCRテスト (+)〉

★GPセンターを含めて3週間移動禁止

★当該農場の全羽数淘汰

〈発生農場から半径30~kmのエリア〉

★抗体検査AGPとHI (H5N1)(10サンプル/鶏舎)

★PCR検査と発育鶏卵を用いたウイルス分離試験

(気管とクオアカの Swap サンプル10羽/鶏舎)

初めてのケースで、移動禁止エリアの半径が30kmであることや、GPを含めて移動禁止期間が3週間であることなどの業態維持に困難な条件がありました。しかし、その後の業界からの申し入れや、A1ウイルスの感染特性を踏まえ、GPからの製品移動はPCR試験でウイルス陰性が確認されればOKという特例措置が実施されるようになりました。

《コラム2》

【第5回国際鳥インフルエンザシンポジウムの内容】

2002年4月14~17日にジョージア大学において開催された国際鳥インフルエンザシンポジウムの内容を記述しました。その時点で世界各国においてどのようにA1が受け止められていたのが感じられます。これまで日本で発生した事象や対応方法を踏まえ、改めて熟読するといろいろ参考になる発表が多いのに気づかされます。しばらくA1をさまざまな角度から考えるにあたって、順次紹介することにします。

—4月14日の講演内容—

(1)1997~99年の南半球におけるA1リポート (英国)

97~99年のH5N1およびH9N2亜型A1発生以来A1の検証が綿密に行われるようになった。97年の北イタリア (H5N2・8件)、97年の香港 (H5N1)、99~00年の香港 (H7N1・3件) があげられ、特に北イタリアでは強毒タイプ発生以前に199件の弱毒タイプの発生があった。H9N2亜型は90年後半でドイツ、イタリア、アイルランド、南アフリカ、ハンガリー、韓国、中国、香港、イラン、パキスタン、中近東で発生して、このタイプがエリアに定着していることを伺わせる。

(2)オーストラリアを含む西半球・アジアの鳥インフルエンザ (米国)

97~00年のA1。97年にはニューサウス・ウェールズ、オーストラリアで鶏とエミューでH7N4亜型発生、これらにはLPA1が絡んでいる。カナダでは国内の鶏からN1、6、7、10亜型ウイルスを、輸入野鳥からH3、13を分離している。メキシコでは94~95年のH5N1亜型大流行の前に弱毒タイプのH5N2亜型ウイルスが分離され、このウイルスは97年および00年にも分離されている。97年以降 (01年までに)、メキシコでは7億8,000万ドーズのH5N2亜型不活化ワクチンと4億5,900万ドーズの鶏痘、A1リコンビナント生ワクチンが使用されている。中部アメリカ (ガテマラ、エルサルバドル) では00~01年にメキシコのウイルスと近縁のH5N2亜型弱毒タイプウイルスが鶏から分離された。アメリカでは24の州でH1~7、H9~11の抗体が確認され、ペンシルベニア州 (96~97年H7N2) とカリフォルニア州 (00~01年H6N2) の発症が採卵養鶏場2戸で確認された。弱毒タイプのH5とH7亜型ウイルスがライブ・バード・マーケットで分離された。

(3)オーストラリアにおける97年のH7N4ウイルスによるHPA1 (オーストラリア)

オーストラリアで分離されたH7N4亜型ウイルス2株で、遺伝子構造が同じであるにもかかわらず病原性を有するものと非病原性のものがあった。

(4)イランにおけるH9N2亜型A1 (イラン)

98~01年イランのプロイラー農場で致死率20~60%のA1が発生した。高い致死率の原因はB、MGやそのほかの複合型感染症に起因していた。

(5)ヒナにおけるH9N2亜型ウイルスの病原性 (パキスタン)

H9亜型ウイルス7株についての検証で非病原性であることが実験的に確認された。複合感染で病原性が高まるため、抗生物質や余病のワクチネーションで被害は軽減できる。

(6)97~98年のペンシルベニア州における非病原性A1の総括 (米国)

ニューヨークのライブマーケットを起源とするH7N2亜型A1は採卵農場14戸、大雞2群および肉用七面鳥農場の被害は300~400万ドルにおよんだ。当該コンプレックス農場 (採卵) では群ごとのウイルス分離試験が継続実施され、陰性である期間は継続飼育された。これらの検疫に対応するために、消毒法、埋却法疫学的検討法や診断法など包括的プロジェクトが発展した。

へと変異するときにとる遺伝子配列の変化といった専門的な情報が紹介された上で国際的なコンセンサスとされているHPA1に対する根本的

対策が紹介されました。(1)A1がパンデミック人型インフルエンザウイルスに変異するのを食い止めるため殺処分されること

(2)HPA1は中央政府によって完全に保障されるが、低病原性鳥インフルエンザ (以下LPA1) の淘汰は、州政府の決定で実施されるため、保

障は各州の決定に従うこと(3)ウイルスの拡散を抑制するための移動禁止エリアが設定されることこれらの対応は、それからのHP

AI発生以来とられてきた内容で、業界ではそれに慣らされてきていますが、山口県の事例以前には情報として理解できても、肌で感じる事ができませんでした。

また、モンテイエル博士の講演でも、世界各国で発生しているHPAI(H5、H7)の拡散状況とメキシコやイタリアで実施されているワクチンの使用を含めた対応方法の概説に止まっています。

しかし、その時点から著者にとつては、HPAIは決して遠い国の問題ではなく、業界全体が真剣に取り組むべき課題として位置づけていました。

実際にH5N1亜型鳥インフルエンザが発生し、半径30kmの検疫エリアが設定されるに至って、風評被害も発生しはじめました。九州の市場では、山口県産の卵を入荷させないのみならず、山口県を通過してきたトラックにも荷物を下ろすことを許さず「持ち帰らせた」といいます。

今回、東日本大震災に引き続き福島第一原子力発電所爆発事故にともない、さまざまな風評被害が発生

しました。「放射性物質を付着させているから」という理由で行政に販売を自粛させられた福島県、茨城県、群馬県、栃木県の指定農産物(ホウレンソウ、かき菜など)はダイレクトな被害を受けましたが、それ以外の作物にも購入の手控えが起きました。

茨城産のダイコンやキュウリなども「通常なら10kg当たり2、000円で引き取られた」という情報を得ました。

それでも生産者は「捨てるより食べてもらえる方がずっと救われる」と語っていたと聞きました。「生業として生産している農作物が無駄に廃棄されるより、誰かの口に入っしてほしい」と。

また、「福島ナンバー車の給油お断り」というガソリンスタンドが関東地域にあった、とか関東へ避難していた被害者の車が福島ナンバーであることから、それと知った近所の住人が「放射性物質を運んで来ているかもしれないから、出て行ってほしい」と避難していた被害者に迫った

という話も見聞しました。

これらは典型的な風評被害です。自分さえよければ他人のことはかまわない・人の被害は関係ないという感覚が風評被害を生むことは、何かことが起きたときには常に実感させられます。

山口県におけるHPAI発生は次いで京都府下(園部市)で発生した事例でセンセーションの極に達しました。この農場では「死亡例が徐々に増える間、出血性腸炎と診断し対処していた」と報道されています。

この事例に関する一連の騒動は(次号で改めて触れます)、単に一つの鶏病発生としてより「それを隠匿した」罪を問うという論調のマスコミによる追跡が特徴的でした。確かにHPAI発生時、とるべき理想的な対応とは言えなかったとしても、それこそ七八年ぶりに発生したHPAIが自分の身に降りかかったときに、人がそんなに理想的に、理的に振る舞えるとは著者には思えません。

今回の震災に際して、インタビューを含むマスコミの果たした影響は計り知れません。著者も、それら

の情報によって、被害者の立派な立ち振る舞いや謙虚な姿勢を知り、実際のなさまざまな評価も知って日本人であることに誇りを感じました。

触発されてボランティアに臨む人々もいるでしょうし、何らかの助けをしたいと考える人々も多いことでしょう。大企業のトップのエゴイステックな振る舞い、為政者の偽善やポーズ、行政の腰の重さなどもこういった情報無しには知り得ません。

しかし、ときにマスコミは無慈悲に牙を剥き、被害者にも襲いかかります(著者は、突然HPAIに襲われた生産者は間違いなく被害者だっただと思っています。たとえ、それに対する対応が今日の常識からみて不適當であったという事実があったとしても……)。

その責任を負って、老経営者夫婦が自らの命を絶ち、社会からの攻撃の手は収まりました。それらのいきさつは、間接的にしか知り得ない著者にとつても、空恐ろしい印象を拭きませんでした。

つづく

